# 保健学研究科

## 多職種協働による子どもの育ちと親支援事業－看護-リハビリテーション連携による子育て中の母親のレスパイトケ

担当学部等 医学部
担当学科等 看護学講座・リハビリテーション学講座
担　当　者 常磐　洋子　教授・牛久保　美津子　教授・外里　冨佐江　教授

◎事業概要

本事業は、保健学科学生（看護学専攻、作業療法学専攻、理学療法学専攻）と保健学研究科の教員と大学院生が看護学とリハビリテーション学の専門性を発揮し、看護-リハビリテーション連携による育児ストレス・育児疲労に対するレスパイトケアを通して様々な子どもの育ちに対応した母親役割遂行を支援し、多職種連携による乳幼児虐待予防に貢献することを目的とする。

◎実施事業等

1）母親レスパイトケア事業実施
本事業は、1回/月開催され、計4回実施した（11/9、12/20、1/30、2/28）。本事業は3つのプログラムから構成された（資料1）。具体的には、①リフレクソロジーでリラックス、②癒しの作業療法、③おしゃべりタイム。
参加者は、乳幼児を育てている母親が延べ24名（平均6名）、0歳～5歳の子ども延べ27名（平均6.8名）、父親延べ9名（平均（2.3名）、学生ボランティア24名（平均6名）であった。
本事業の１～４回の評価について5段階評価による満足度についてアンケートを実施した（資料2）。その結果、リフレクソロジーでリラックスは1-4回すべてで5、癒しの作業療法は平均4.9、おしゃべりタイムは平均4.8であった。母親・父親の全体の評価は4.8-5の範囲で平均4.9であった。学生ボランティアは4.3-5の範囲で平均4.7であった。
参加者からのコメントを以下にまとめた。①リフレクソロジーでリラックスでは、自分の癒しの時間が十分確保できた。②癒しの作業療法では、集中して作品作りができ、自分のために時間を使うことの大事さが実感できた。③同じような年齢の子どもがいるお母さんたちとお話ができてリフレッシュでき、ストレス解消になった。④遊び場コーナーで学生と専門家が子どもと遊んでくれたので、安心して自分の時間を持つことができた。また、子どももとても楽しそうに遊んでいた。
2）看護-リハビリテーション連携
本事業開催にあたって3回の運営会議を開催し、母親のレスパイトケアにおける健康課題の共有と運営における課題を共有して連携を持ちながら事業の成果を上げることができた。
3）参加した学生の学び（資料3）
参加した子どもとの触れ合いを通して成長・発達に関する知識を統合することができた。また、子育て中の母親や父親の不安や悩みを知ることができ、親のレスパイトケアの重要性を理解することができた。
4）本事業に対する要望
参加者全員（母親・父親）から本事業の継続の要望があった。

◎期待される成果

1）乳幼児をもつ母親の育児ストレスの解消と育児の孤立化を防ぐことができた。
本事業に参加した全員から、レスパイトケアのプログラムに参加することによって自分の癒しを得ることができ、育児ストレスが解消されたとのコメントが得られた。また、参加者同士が自主的に連絡先の交換をするなど、本事業参加後に一緒に食事に行くなど交流がもたれるようになり育児の孤立化を防ぐことができた。
2）看護-リハビリテーション連携による母親支援によってそれぞれの母親の健康課題に応じた母親役割遂行を支援し乳幼児虐待のリスクを取り除くことができた。
母性看護学・地域看護学・在宅看護学の教員が参加者の健康課題を共有し、それぞれの立場から育児ストレスや子育てについての不安や悩みについて傾聴し、必要と判断された事項について助言をすることによって参加者の暮らしを見据えた母親支援をすることができた。そのことによって参加者からは育児におけるイライラについていろんな専門家に話を聞くことができ、日常の中での子どもとの向き合い方やイライラへの対処について落ち着いて考える機会が得られたとの声が聞かれた。
3）保健学科の学生が子育て中の母親の育児状況をふまえた多職種連携協働による母親支援における専門的知識と技術を修得し臨床現場への活用を学ぶことができた。
学生は参加した子どもたちとの遊びを通して日常の中での育児の状況に触れることができ、母親支援の重要性を理解することができた。また、母性看護・地域看護学・在宅看護の看-看連携や作業療法を取り入れたレスパイトケアの実際に参加することによって多職種連携による母親支援における専門的知識と技術を習得することができ臨床現場での活用をイメージすることができた。